



一步一步 第5号

平成28年5月17日（火）発行

校長 深谷 浩一

おらが町，おらが高校（1）

名将浅野監督のもと、好投手斉藤郁夫君を擁した開校三年目の明野高校は、あれよあれよという間に、とうとう決勝戦で竜ヶ崎一高を破り、茨城県大会を制しました。甲子園出場が決まったのです。

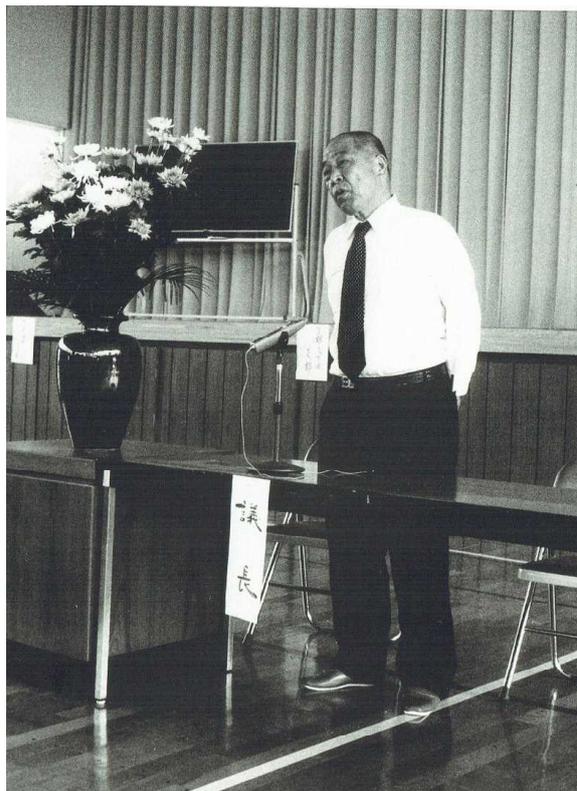
誰も予想だにできなかったことが現実となり、学校関係者のみならず、旧明野町の町民すべてが歓喜の渦に呑み込まれてしまいました。特に当時旧明野町の町長であった加倉井正利氏は、開校時より野球部の後援会長を務めており、その喜びようは尋常でなかったようです。

というのも、もともと明野高校は、明野町だけでなく真壁郡内にも普通高校がなかったことから、「ぜひおらが町に普通高校を！」という旧町民の悲願がやっと実って開校した高校であり、その誘致を積極的に進めたのが加倉井町長その人だったのです。

しかし、甲子園出場が決まり、その加倉井氏を悩ませたのが、甲子園への選手・応援団の莫大な遠征費でした。加倉井氏の見積もりによると、「約三千人の応援団を甲子園に送り出すとすると、貸し切りバス六十台が必要。バス1台往復が三十三万円で二回戦まで進出すると予想して、バス代がざっと四千万円。選手の宿泊費補助が六百万円。さらに入場料や横断幕、応援団の帽子制作費などを入れると五千万円の計算。」（『甲子園への道』41ページ。）でした。

伝統校であれば、何千人という卒業生がおり、同窓会が中心となって寄付を集めるのでしようが、「開校三年目」では、頼りにすべき卒業生は一人もいません。さて、加倉井氏はいったいどうしたと思いますか。

加倉井氏はまず、明野町役場に「明野高甲子園出場実行委員会」を組織し、「一人のOBもいない学校が甲子園に行くのに、町が助けなくて誰が助ける。」と言って町費で二千万円を負担することを決めます。県立高校の出費に町が二千万円を負担するなど、現在ではとても考えられないことですが、当時でもかなり異例な財政出動だったと思われます。次に、企業寄付で一千万円を賄い、残り二千万円をPTAの責任で出資することを提案しました。7月31日に明野体育館で開かれたPTA・後援会合同総会でも加倉井氏はこうぶち上げました。「一人の卒業生もいない学校が甲子園に行くのに、PTAががんばらんことには誰がやる」。会場からも「町長、大丈夫だ!」「任せておけ」と声が飛び交い熱気に満ちていたそうです。しかし、それでも加倉井町長は、「果たして五千万円は集まるのか」と内心大いに不安だったといいます。それもそのはずで、選手が甲子園に向けて出発するまで、あと2日しか残されていなかったのです。（つづく）



PTA・後援会合同総会で募金を訴える加倉井町長



一步一步 第6号

平成28年5月19日（木）発行

校長 深谷 浩一

おらが町，おらが高校（2）



県庁前では大勢の人々が明野ナインを拍手とバンザイで迎えてくれたのに、企業だけで一千万円をはるかに超えていたからです。

この町をあげての募金活動は功を奏し、最終的には当初の計画の2倍以上の募金が集まりました。

「これで子どもたちを甲子園に行かせることができる。」

「これで甲子園でみんなで応援できる。」学校関係者も町関係者もそんな思いで胸をなで下ろしたことでしょう。特に、町長として、野球部後援会長として募金活動に奔走した加倉井氏の喜びは計り知れないものでした。

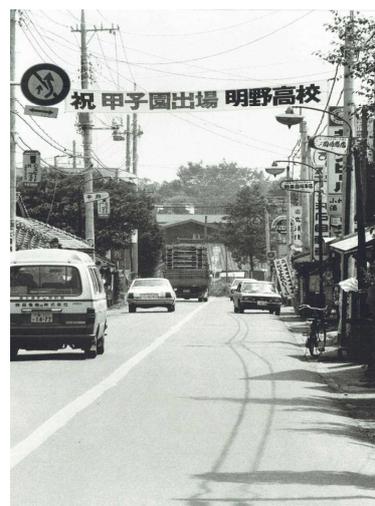
昭和54年8月3日午前8時半、壮行会場の旧明野町役場前は二千人の町民でごった返していました。会場に入り切れない人波が県道脇まであふれていました。

「できれば二回戦までは、勝ち進んでほしい。団結を固めてぶつかってほしい。応援はまかせておけ。」加倉井町長はマイクに向かってそう叫び、胸を張りました。「そうだ、そうだ」という町民の声、声、声。

「力の限り戦ってきます」選手を代表して鹿野谷主将が決意表明。「がんばれよ」約二千の人波が大きく揺れ、大きな拍手が巻き起こりました。

「万歳！」に送られて選手を乗せたマイクロバスは下館駅へ。甲子園に向けて、いざ出陣です。（つづく）

「明野高野球部甲子園出場に伴う二千万円臨時支出金」の議案が臨時町議会で可決されました。この議案については、異例ではあっても、加倉井町長ははじめから可決されるものと信じていたようです。「町の子どもたちが甲子園に出るための支出に反対するような、そんな情け知らずの土地柄じゃない」と。この議案が可決したこと以上に加倉井町長を喜ばせたのは、企業の大口寄付が予想以上に好調なことでした。企業寄付と周辺市町村からの募金で一千万円と予想してい



町中に架かる横断幕



一步一步 第7号

平成28年5月20日（金）発行

校長 深谷 浩一

おらが町，おらが高校（3）

明野高校が甲子園に出場するために集めた募金は、最終的にはなんと1億円を超えました。1年間かけて集めた金額ではありません。甲子園出場が決まってから、わずか1週間のうちに寄せられた募金です。一回戦の応援のために、町では、貸し切りバス100台を調達して、職員たちが協力して募金に協力してくれた町民4500人を甲子園に運ぶ手はずを整えました。そして、試合前日の夕刻、薄暮の中甲子園に向けて出発したのです。



高速道路を大型バス100台がつながって走る姿はまさに圧巻だったことと思われます。翌朝、その風景を取材しようとテレビ局や新聞社のヘリコプターが何機も上空を舞い、大きなニュースとして報道されたのです。「明野高校」の名が全国に広まった瞬間でした。



また、甲子園球場の入場券を手に入れるのも、とても苦労したようです。何と言っても本校の応援関係者は5000人もおり、入場券購入窓口でとてもまとめて売ってもらえる数ではありません。さて、皆さんは、どのようにして入場券を購入したと思いますか。

甲子園への先発隊でこの「入場券購入」の任務にあたったのは、本校の近藤隆先生です。近藤先生は、「組合せ抽選会終了後に購入することが現地本部の最大の任務」と自覚して、再三にわたって朝日新聞社、甲子園球場に問い合わせましたが、1校でまとめて購入できるのは「二千枚が限度である。」ことを知らされます。そこで、抽選の結果、「二日目第2試合、対高松商」と決まるやいなや、入場券窓口へ並びすかさず2000枚を購入しました。しかし、購入予定の5000枚には遠く及ばず、途方に暮れているとき、審判員の永野氏に出会います。氏は住金鹿島に勤務する傍ら、高野連の審判員でもあったのです。そして、氏の紹介でさらに1500枚を確保することができたのです。しかし、それでもまだ1500枚ほど足りませんでした。この不足分については、明野町役場の職員に尽力していただきました。応援団の引率等にあたった町の職員が到着後直ちに窓口へ並び、購入できるだけ購入する戦術を採ったそうです。しかも、混乱を避けるためにその戦術を事前に町民に知らせ、選手の家族に先に入場券を配布するなど、優先順位を決めてあったのです。そのおかげで、町民は納得して入場券が手に入るのを待つことができ、暴動が起きることもなく4500人すべての人に入場券を手渡すことができたのです。

それにしても、この入場券の件を含めて、4500人の町民をバス100台で何のトラブルもなく甲子園まで誘導し、安全に帰郷させた職員の皆さん方の強力な組織力と安全管理能力には頭が下がる思いです。（つづく）



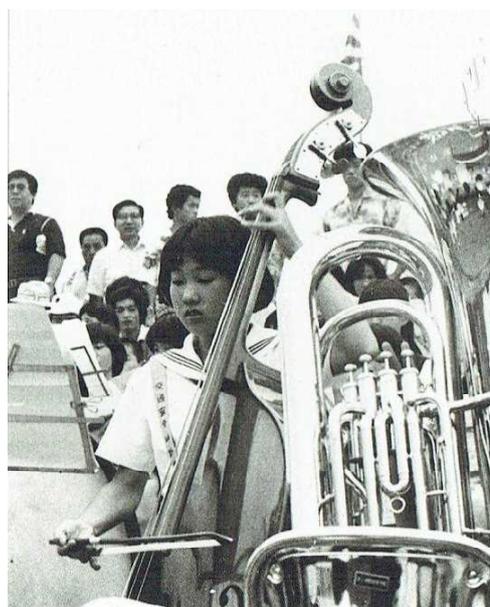
一步一步 第8号

平成28年5月23日（月）発行

校長 深谷 浩一

おらが町，おらが高校（4）

次に、ブラスバンドとチアガールについてお話しします。本校のブラスバンド部員は十数名しかいなかったもので、とても甲子園で生徒、明野町民5000人を率いて応援をリードすることはできません。そこで、ブラスバンド指導にあっていた本校の内海春美先生は、明野中学校のOB、OGの力を借りることにしました。本校生と合わせて総勢四十数名でブラスバンドを編成しました。わずか十日足らずの練習でしたが、甲子園で演奏を始めると、練習不足の不安は一気に吹き飛びました。当時ブラスバンド部長だった山口美智子さんは、「ただ、無我夢中でした。私も、また多くのブラスバンドの仲間も、緊張と暑さで二食ぐらい抜いてしまったこともありましたが、そんな暑さも空腹も忘れて、みんなよく頑張ってくれたと思います。」と当時の記録に残しています。



チアガールの指導にあっていたのは、本校教諭の坪松喜代子先生でした。本格的なチアガールの応援となったのは、県大会の決勝戦からだそうで、「それまでは声だけの応援であったが、生徒達が自主的に応援団席に色を添え始めた」のだそうです。

甲子園では、「フレッシュ明野にふさわしい真っ赤なユニフォームを着けた女生徒二十二名、九日のアルプススタンドでは、初めてとは思えない程熱の入った堂々たる応援ぶりであった」といいます。

当時チアガールのリーダーを務めた

3年生の横浜友子さんは、県大会決勝の前日に「『ユニフォームなんてなくてもいい。私達の気持ちに通じれば・・・。』と自主的に申し出て、チアガール22人が誕生した。」と県大会決勝戦の当日になって初めてチアガールを組織した応援秘話を語っています。

さて、次回は再び話を甲子園での闘いに戻します。



一步一步 第9号

平成28年5月24日（火）発行

校長 深谷 浩一

高松商を延長十三回撃破!

甲子園球場での一回戦の相手は、香川県代表の高松商業でした。それまで夏の甲子園出場16回を誇るまさに「古豪」の名にふさわしい相手です。

誰もが「高松商有利」と考えていましたが、明野ナインは「やってみなければわからない」と闘志を燃やしていました。浅野監督はミーティングで、「お前たちは決して強くはない。しかし、自分の力を出せばやれる。」と選手たちを励ましました。

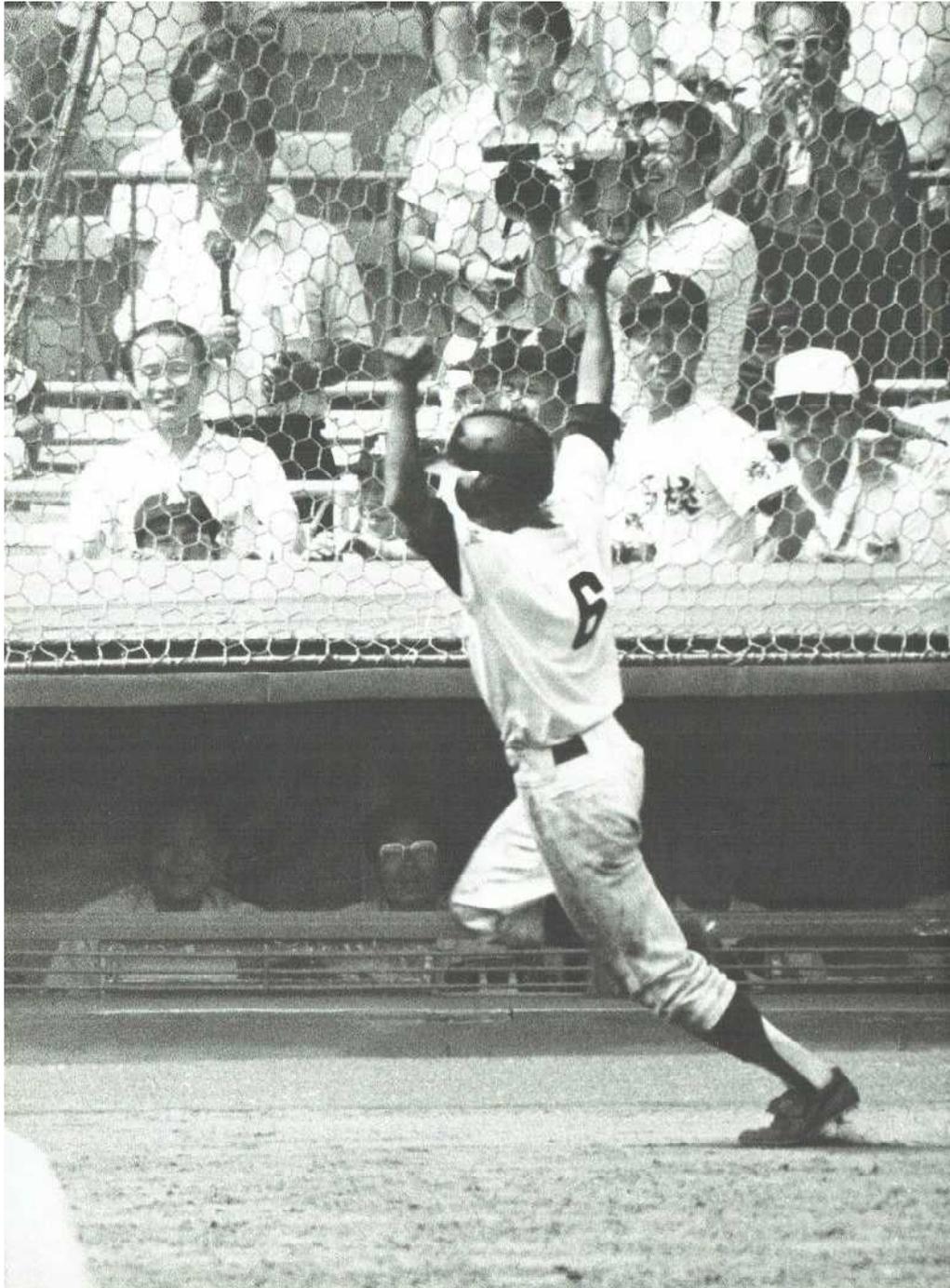


鈴木ライトオーバー三塁打 大林四球 無死一・三塁で渡辺スクイズ成功 鈴木生還 明野は1点先取

「十二年間の監督生活から、浅野は『野球を強くするのは日ごろの生活だ』との信念をいだいている。だから服装、言葉遣い、礼儀には野球技術以上にうるさく言う。『基本プレーでミスをするのは、生活になおざりな点があるからだ。』と考えるのである。浅野はこうして鍛え上げた選手にひそかに期待している。《確かにうちの選手は見た目は鈍重で、都会チームのようなはしっこさはない。だが、本番では鈍牛が怒り狂ったときのような力を発揮してくれるのではないか》（＝敬称略）」とは、大会後に毎日新聞が掲載した「初陣 明野高」での監督評でした。

さて、実際の試合が動いたのは、五回裏、本校の攻撃からでした。この回3点を入れて先行した本校は、六回にも1点を追加し、4-0とリードします。しかし、七回から今度は高松商の反撃が始まりました。七回に1点、八回に2点、そして九回に1点を返して、とうとう4-4の同点に追いつかれてしまいました。

延長戦に入り、十回と十一回はともに本校は三者凡退で押され気味の試合展開でした。十二回裏は、大林君が四球で塁に出たものの、渡辺君ピッチャーゴロ、武井君サードゴロでチャンスを活かせませんでした。



延長13回裏、躍り上がって決勝のホームを踏む中沢君

高松商	4	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0	0	0	0
明野	5	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	1

十三回裏、トップバッターの中沢君がレフト前ヒットで出塁しました。一死後、中沢盗塁、バッター斎藤も四球を選んで、一死一・二塁のチャンスが巡ってきました。続くバッター鹿野谷君はここでピッチャーゴロ。相手ピッチャー中尾君は、ここで併殺をねらってセカンドへ送球しました。セカンドはアウトでしたが、あせった相手のセカンドが一塁へ悪送球。この間に走者中沢君がホームに還り、決勝点となりました。劇的な「サヨナラ勝ち」でした。



一步一步 第10号

平成28年5月30日（月）発行

校長 深谷 浩一

前橋工に惜敗!

二回戦は関東勢同士の闘いとなりました。群馬県代表の前橋工業です。前橋工業は「関東の横綱」（浅野監督）だけあって、試合巧者でした。本校が先行したものの六回に逆転され、七回になんとか同点に追いついたものの、その直後にすかさず突き放されてしまったのです。みごとな試合運びといえるでしょう。



試合は、本校の先制タイムリーで幸先のよいスタートを切ります。

無死一・二塁から北島君が送りバント、鈴木君は三振に倒れたものの続く大林君が2（ストライク）1（ボール）から4球目をセンター前にはじき返し、斎藤君、鹿野谷君の二者を生還させました。

	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	立	立
前橋工	0	0	0	0	0	3						
明野	0	2	0	0	0							
第一												
前橋工												
明野												

六回表、前橋工業の反撃が始まりました。四球とライト前ヒットでランナー一・三塁から、二盗を許し、二・三塁となったところで、左中間二塁打で2点。さらにセンター前二塁打で逆転を許してしまいました。

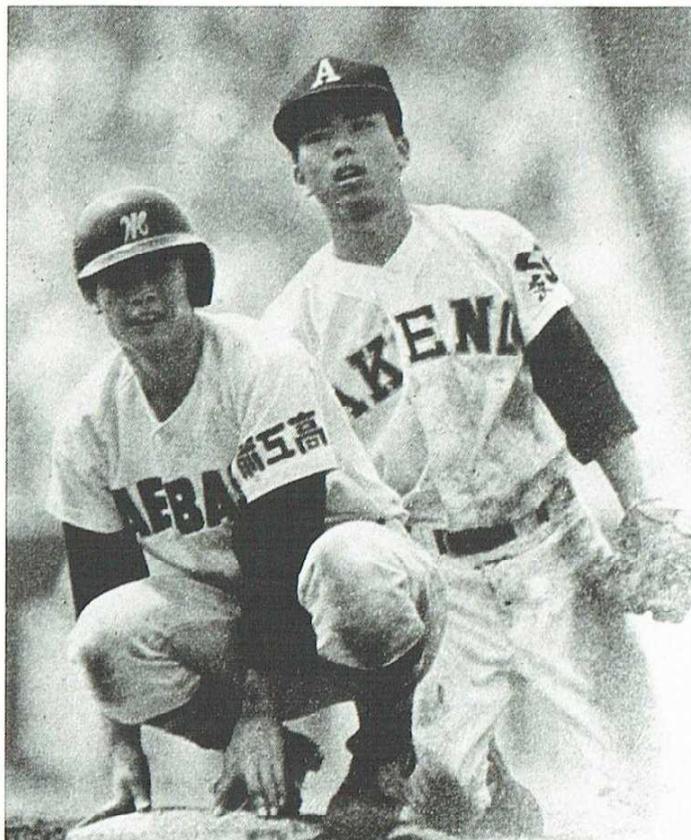
しかし、その後、七回に武井君のライト前ヒット、中沢君の左翼線二塁打で大林君が生還し、同点に追いつきました。

しかしこれで試合が終わらないのが、「関東の横綱」の横綱たる所以（ゆえん）です。直後の八回にすぐに猛攻を仕掛けてきました。一死二塁から左翼線二塁打，続くバッターがセンターオーバーの三塁打で再度の逆転を許してしまいました。好投手斎藤君に，二塁打，三塁打の連打を浴びせかけました。力の差を見せつけられた瞬間でした。

しかし，本校野球部，大健闘。私はこんな学校の教員であることに今誇りを感じています。

この試合を振り返って，浅野監督は，「二回戦の前橋工はやはり関東の横綱であり力は一枚上だった。私も選手も精一杯戦った。九回最後の攻撃で円陣を組み、『とうとうここまで来たが最後まで胸を張ってやろう』と激励した。この言葉通りの試合ができて，今はただ，晴れ晴れした気持ちである。私は戦前，相手は相手校ではなく，甲子園球場の魔物に目標をおいていた。第二戦で戦った前橋工には敗れたが，甲子園球場には勝ったと感じている。甲子園に出場することは高校球児の夢である。確かに，ナインは一生の思い出をつくった。社会に出てもこの財産を大切に誇りを持って生きていくものと確信している。何事にもまじめであれという私の教え通りに，苦しい練習に耐えてきた選手達の努力の賜である。このチームを引き連れ，甲子園に行けたことは無上の幸であり，この思い出はまた，私にとっても一生の宝物となろう。」と書き記しています。この時の選手，監督だけでなく，本校にとっての原点も実はここにあったのではないかと思います。

あれから，37年が過ぎました。その後退職された浅野監督は，今でも週末になると，本校を訪れ，バックネット裏から選手の練習の様子を見守ってくれています。



前橋工，一死二塁から，二塁打，三塁打の連打で再度の逆転を喫す

前橋工	5	0	0	0	0	0	3	0	2	0
明野	3	0	2	0	0	0	0	1	0	0